

株式会社 大忠

株式会社大忠は1971年に創業した材木販売と建築工事を手掛ける企業。創業以来、一貫して国産の天然素材にこだわり続けている。事業の傍ら、本社には国産材の魅力を多くの人に知って貰う目的で木の博物館「木力館」^{きりよくかん}を開館、訪れる人を楽しませている。創業者で現会長の大槻忠男氏は旧岩槻市（現さいたま市）の市会議員を4期16年間務めた実績の持ち主で、現在は「木力館」^{きりよくかん}の館長として木の魅力について発信し続けている。



株式会社大忠本社の風景 右側の建物は「木力館（きりよくかん）」

■高校卒業後、上京し 材木屋に住み込みで働く

大忠の創業者、大槻忠男氏（以下、大槻会長）は1937年、宮城県伊具郡筆甫村（現伊具郡丸森町）に農家の次男として生まれた。1955年に高校を卒業すると、働き口を求めて1人夜行列車に乗り上京する。大都会に期待に胸を膨らませて上京したが、当時は就職難の時代、とにかく生活できればと選んだのが木場の材木屋だった。叔父が神田にある全国森林組合連合会で働いていたことから、叔父を頼っての就職でもあった。材木屋を選んだのにはもう1つ理由があった。住み込みで使ってくれるという条件を提示されたからだ。大槻会長はその話を聞いた時、「材木屋で働きながら、その間に、どこか別の職を探そうと思っていた」と振り返る。ところが、実際に働き始めてみると思う様に仕事が見つ

からない。そうこうしているうちに、不思議なもので、大槻会長自身が次第に木に興味を持つようになり、材木の仕事に真剣に打ち込むようになった。

仕事が軌道に乗り始めると、ある日叔父から呼び出された。「仕分けの指導をする仕事をやってくれないか」と思いがけない誘いを受けたのだ。当時、叔父が勤めていた森林組合は全国各市町村にあり、地方から東京に材木を出荷する際、1等や2等など材木に等級づけし仕分けをしなければならず、その仕事を組合が任されていた。叔父はこの仕分けの監督指導を大槻会長に任せようとした。突然の依頼であったが、たつての叔父の頼みならばと大槻会長は指導員に転職した。

仕事はハードであった。北海道から鹿児島まで材木の仕入をしながら、指導をして回るもので、1週間交代で地方に出張しては市場で競りに参加した。その繰り返しの中で独学

で材木について覚えていった。材木の販売は、現在は1立方メートル単位の値段で競りをするが、当時はメートル法に変わる前で、寸で幾らという販売方法が採られていた。小売をするのに柱1本幾らなのか、計算ができないと販売できない。大槻会長は材木を実際に手で持ちながら、2寸5分や3寸など材木の大きさを手の感覚で覚えた。「五感で感じながら覚えた」(大槻会長)と笑ってみせる。

■材木販売をするため岩槻で起業

材木市場に勤めていると、関東各地の材木業者が大槻会長の元に材木の買い付けにやってきた。その中に埼玉県内の業者もいて、時折、岩槻をはじめ越谷、浦和、川口などの材木屋を訪問して歩く機会があった。材木屋を見て回るうちに、大槻会長は自分で材木屋をやってみたいという気持ちが頭をもたげてきた。その気持ちは次第に強くなり、遂には独立を決意する。東北から身一つで上京して10年目のことであった。独立を決めると早速“場所探し”に入った。開業するといっても準備には数年は要すると考え、その間は引き続き、材木市場で働こうと考えていた。そのため、東京に通勤できる場所、そして土地の値段が安い場所を集中的に探した。千葉、埼玉を中心に探し回った結果、最後に残ったのが“岩槻”だった。越谷市の不動産業者が紹介してくれたのが現在の大忠の本社がある場所で、1964年に最初に85坪を購入し15坪で平屋建ての自宅を構えた。その後、1971年5月に株式会社大忠を立ち上げた。

独立を果たし岩槻で商売を始めたものの、岩槻には地縁も血縁もなかった。材木市場に勤めていた関係で地元の材木屋は知っていたが、材木の売り先として肝心の工務店や大工に知り合いはなく、大槻会長は電話帳で工務店を探しては一軒、一軒に営業に回った。し

かし、最初はまったく材木が売れず商売にならなかった。仕方がないので、売れているフリをするために朝、営業用のバンに材木を積んでは工務店をまわり、昼食を食べた後、別の材木に積み替えてまた営業に出かけるという日々を続けた。「誰が見ているか分からないから、常に売れている顔をしていた」(大槻会長)と苦しかった昔を振り返る。

知らない土地で商売をすることは容易ではなかった。商圏は岩槻と越谷と決めていたが、まったく地の利がないため最初は道路も分からず、田んぼ道に入って帰れなくなるのは日常茶飯事であった。毎日が大変の連続であったが、次第に道も覚え、地元の工務店にも顔が売れるようになった。そして時間の経過とともにポツポツと仕事が取れるようになった。大槻会長は地元で認知されるようになり喜んだが、今度は資金繰りに悩まされた。

事業を始めたばかりで手元の資金が厚くなかったことから、手元に材木の在庫を持つことができず、注文を受けるたびに材木問屋に仕入れに出かけなければならなかった。日中に注文が入ると、都度、木場の材木問屋に電話をかけ、その日の夜に大槻会長は一人車を運転しては材木を取りに出かけ、翌朝一番にお客さんに届けた。そうした生活を約3年ほど続けた。地元には、そうした大槻会長の苦



大忠本社風景



写真左：木力館（きりよくかん） 写真右：木力館の一階と木製のらせん階段

労を知って可愛がってくれる大工さんがいた。「ウチが資金繰りに困ると決まって注文を出しては、即金で払ってくれた。本当に有難かった」（大槻会長）と話す。

■市議会議員を4期16年間務める

大槻会長には材木事業の経営者のほかにもう1つ肩書があった。岩槻市議会議員（現さいたま市議会議員）だ。1987年から4期、通算16年にわたり政治家として議員活動に携わった。岩槻で生まれ育った訳ではなく友人も支援者もない。政治に興味がない訳ではなかったが、議員に立候補するなど考えたこともなかった。きっかけは地元選出議員の高齢化だった。当時、大忠本社のあった岩槻市川通地区（現さいたま市川通地区）からは4人が市議会議員で選出されていた。ところが、議員は皆70歳以上で引退を控えていた。これは大変だということになり、自治会が作戦会議を進める中で、地元で事業を立ち上げ成功していた大槻会長に白羽の矢が立った。「議員に立候補してくれないだろうか」突然、降って沸いた話に、大槻会長は丁寧に断った。それから4年が過ぎ、次の選挙を控える年になると再び自治会から打診が届いた。4

人いた地元選出の議員は在職死亡などもあり、次回選挙では立候補者がゼロになってしまう可能性があった。いよいよ大変だということで、自治会の正副会長が連日の様に大槻会長の元を訪れては前回よりも強く出馬を要請した。相手のあまりに熱心な態度に、大槻会長は「自分は岩槻の生まれではない。同級生がいるわけでも、親戚がいるわけでもないから、当選するわけがない。興味はなかったが、今後も地域に世話になっていく。地域の顔を立てるだけでも出るだけ出ようと女房に相談した」と笑いながら話す。選挙への出馬が決まると、地域が一丸となって選挙運動を展開した。結果は30人中8番目で当選した。青天の霹靂であった。当選が決まると二足の草鞋は履けないと、家業は田舎から呼び寄せ専務をしていた弟に任せ、大槻会長は議員に専念することを決めた。「選ばれた以上は、とにかく一生懸命やろうということで、16年間はほとんど市議会議員として尽力した」。その人徳と仕事への姿勢から最後には、市議会の議長にまで選ばれた。

■木の博物館「^{きりよくかん}木力館」をオープン

大忠本社を訪れると、2階建ての大きな木

造建築物が目に飛び込んでくる。2006年4月にオープンした木の博物館「木力館」だ。この建物は2005年に大忠の経営を息子の大槻文兵氏に譲った事を機に建てたもので大槻会長が館長をしている。木力館はスギやヒノキ、ポプラなど国産の天然材だけを使用して建てた六角形の形をした博物館で、建物の躯体はホゾを貫き込み栓を使い、伝統工法で建築されている。建物に一步足を踏み入れると、木の香りや木の温もりを十二分に体感することができるのが特徴で、「私の半世紀にわたる経験を、多くの人に、木に興味を持たせようという考え方で建てたものだ」（大槻会長）。大忠は材木販売から事業をスタートしたが、1967年5月に住宅事業部として丸森ハウスを立ち上げた。大槻会長の信念から、丸森ハウスでは海外から輸入される木材は一切使わずに国産材だけにこだわる家づくりを行っている。最近の戸建て住宅では断熱材が使われているが、大槻会長は「それは外国産の薄い木を使うから。断熱材を入れたり、化学物質だけの家ができてしまう。私は、自然素材だけを使ったこだわりの住宅を作りたいし、そういう家づくりを五感で感じさせようと実物を建てた」という。

大槻会長は9年前から毎年、地元の小学校に出前講座をしている。4年生1学年130人に対して森林がいかに大切かという話を行っている。講義の後は学生を木力館に連れてきて木の大切さについて説明している。

木力館では一切、住宅販売のための営業活動は行っていない。大槻会長は「“スギやヒノキという国産材は高い”という先入観があるが、それは大きな誤解だ。確かに昔は木材は高かったが、当時は人件費が安かった。50年前と比較すると、人件費はおそらく20倍ぐらいではないかと思うが、材木の値段はそれほど変わらない」と国産材を推奨する。



大槻忠男邸 木工事風景

■信念を表現するモデル住宅を建設

現在、大槻会長は岩槻城址公園の近くに“大槻忠男邸”を建設している。工事中の建物には「人生後半の住まい」と書かれているが、この家は大槻会長の信念を貫いたモデル住宅で、前を通った人が、自由に中に入って見て貰う事を意識して建設を決めたものだ。住宅は埼玉県産の木材をふんだんに使ったオール天然素材の建物で、アルミサッシも使わず雨戸も戸板を使用する。畳の間も一間作り、居間には囲炉裏も作る。当然、風呂はヒノキ風呂という徹底ぶりだ。大槻会長は「昔の本当の木造住宅で、こんな家は日本中探してもないんじゃないかな。自己満足かもしれないけど、俺の手掛ける最後の仕事だよ」と笑ってみせる。

企業概要

株式会社 大忠

<http://www.daichuu.com/>

代表取締役会長：大槻 忠男
創 業：1971年5月
事業内容：材木販売、住宅建築
本 社：さいたま市岩槻区新方須賀558-2
電話番号：048-799-1561
取 引 店：岩槻支店

